※無断転載・複写はご遠慮ください。

第２回　科学隣接領域研究会（2016.12.21）

科学と宗教　－その２－

「私にとっての宗教」

キーワード

オウム真理教裁判/　教行信証　「信と証」

無意識

『野生の思考』『デルス・ウザーラ』

運命の人

ありのまま

超能力

公益財団法人
日本科学協会

※無断転載・複写はご遠慮ください。

第２回科学隣接領域研究会（概要）

日時：2016 年１２月 21 日（水）10：00～12：００

場所：日本科学協会会議室（東京都港区赤坂 1-2-2　５Ｆ）

参加者（敬称略）

科学隣接領域研究会	リーダー	金子　務（大阪府立大学　名誉教授）
	サブリーダー	酒井　邦嘉（東京大学大学院総合文化研究科　教授）
	メンバー	前野　隆司(慶應義塾大学大学院 SDM 研究科　委員長・教授)
	〃	安藤　礼二（多摩美術大学芸術人類学研究所所員/同大学美術学部芸術学科　准教授）
	〃	植木　雅俊（NHK 文化センター　講師）
	〃	岡本　拓司（東京大学大学院総合文化研究科　准教授）
	オブザーバー	正木　晃（慶應義塾大学文学部　非常勤講師）
事務局	会長	大島　美恵子
	常務理事	中村　健治
	業務部マネージャー	石倉　康弘
	〃　　スタッフ	豊田　悠也、堀籠　美枝子

資　料

◆「私にとっての宗教」発表資料

・前野先生資料　・私にとっての宗教資料

・岡本先生資料　・新聞広告切抜き資料「結婚のすすめ」

・正木先生資料　・正木先生紹介資料（事務局作成）

・宇宙理解の統一を求めて（編者：柳瀬睦男、発行所：南窓社）

・ボンヘッファー　獄中書簡集より「作業仮説としての神」（訳：村上信、発行所：新教出版社）

・　〃　　現代キリスト教論理より「作業仮説としての神」（訳：森野善右衛門、発行所：新教出版社）

・ティリッヒ「信仰の真理」（訳：谷口美智雄、発行所：新教出版社）

内　容

・金子先生のご挨拶

・事務局連絡事項

・前野先生の自己紹介（初登場）

・メンバー発表「私にとっての宗教」

メンバーの先生が、それぞれ「私にとっての宗教」について 7～8 分程度発表されました。

（※1　各先生の発言（口述）を 3 頁以降で公開しております。）

・正木先生のご講義「オウム真理教」

第２回目となる「科学と宗教」研究会は、宗教学がご専門の正木晃先生（慶應義塾大学文学部　非常勤講師）にご講義いただきました。宗教と科学の関係について、先生が関わったオウム真理教の裁判でのお話を始め、「教行信証」という概念（仏教の真理把握の構造）、宗教と科学は「信と証」の関係が逆転している事、宗教の中でも一神教と仏教の違いや宗派によっての違いがある事等、幅広くお話いただきました。

（※2 正木先生の講義（口述）を 13 頁以降で公開しております。）

・大島会長のご挨拶　　以上

※無断転載・複写はご遠慮ください。

※1　メンバー発表「私にとっての宗教」

第 2 回目の研究会は、「私にとっての宗教」について」研究会メンバーに 10 分ずつ語っていただきました。口述の文章となっており読みにくい箇所もあるかもしれません。

◆発表順◆

	発表者（ご所属）	頁	キーワード
①	前野　隆司　先生 （慶應義塾大学大学院 SDM 研究科　委員長・教授）	3-5	自己紹介/『脳はなぜ「心」を作ったのか』/無意識/エピソード記憶/幸福学/脳科学
②	金子　務　先生 （大阪府立大学　名誉教授）	6-7	無宗教/普遍的に宗教的なもの/『野生の思考』/『デルス・ウザーラ』/アポロ 11 号/求道学舎
③	岡本　拓司　先生 （東京大学大学院総合文化研究科　准教授）	7-9	運命の人/エピソード/人知を超えた運命のようなもの
④	植木　雅俊　先生 （ＮＨＫ文化センター　講師）	10-11	中村元/原始仏教の重要性/ありのままに物事を見る/詐欺の例/仏教史
⑤	酒井　邦嘉　先生 （東京大学大学院総合文化研究科　教授）	12	超能力/超心理学/科学的な予言力/自然法則/ケプラー

※無断転載・複写はご遠慮ください。

①前野隆司先生（自己紹介を含む）

慶應義塾大学の前野と申します。初めての方、はじめまして、よろしくお願いいたします。

用意した紙を見ていただきながらお話をさせていただければと思います。私は宗教について素人の、もともと工学出身なのです。ですからみんな文系の先生なのだろうなと思っていましたが、名簿をみると物理出身という方もたくさんおられますし、やはり文理融合なのですね。

でも、物理ではなくて工学出身というのが私の特徴だと思います。前回、金子先生から紹介いただいた資料をそのまま持って来たのですけれども、2 ページ目に私の経歴のようなものが書いてあります。機械工学科を出てキヤノンに勤めるエンジニアでした。カメラをやっていたのですけれども、大学に移ったのが 1995 年で、キヤノンに 9 年勤めた後なのです。ここでロボットの研究を始めました。そのときはあまり意識していなかったのですけれども、もともと心の問題にも興味があったので、ロボットの研究をしていれば、少しずつ心の研究に近づくかなというのが直感であったのだと思います。

その後、2004 年に『脳はなぜ「心」を作ったのか』という本を書きました。これは茂木健一郎さんがクオリアということを言い始めた頃で、その考えは間違っていると強く思ったのです。それでその考えを、世の中を正さなければいけないと思って、初めて縦書きの本を書いたのが、この『脳はなぜ「心」を作ったのか』なのです。これは認知科学とか脳神経科学で分かっていた、後で紹介しますがリベット先生の研究成果などを見ると、心は幻想というようものではないかというのが結論です。茂木さんは、心というのは世界最大の謎なので、これを科学で解き明かさなくては言うのですけれども、私は、東洋的思考というか、幻想で心はないみたいなことで説明がつくから、茂木さんそんなに大騒ぎしなくてもいいのではないのかというのが、この本の趣旨だったのです。

その後、2008 年に理工学部の機械工学科から、システムデザイン・マネジメント研究科といって、文理融合の大学院に移ったのです。これを機会に幸せの研究というのを始めまして、人はどうすれば幸せになるのか、あるいは工学者ですので、たとえばカメラとかロボットを使えば使うほど人々が幸せになるというような、人工物の設計論としての幸福学のようなことをやるようになりました。

次のページに、金子先生との私の部屋での写真が写っています。この下にあるのが今日お話ししたいことです。この『幸せのメカニズム』と『脳はなぜ「心」を作ったのか』という二つの本は、当初はべつに仏教とか宗教とは全く関係のない本のつもりでした。しかし、右側の『脳はなぜ「心」を作ったのか』は人の心とはそもそも何かということなので、仏教や宗教における根源的な問いと相似形をしていると思っています。

一方で、仏教におけるお説教というのは、心とは何かという本質的な議論に対して、どうも胡散臭い軽いものだという誤解をしていたのです。しかし、最近思うのは、『幸せのメカニズム』という私の本は、人はいかにして幸せになるか、人はどういうふうに生きるべきかという、倫理学に近いことで、これが宗教におけるお説法のようなものと似ていると思うのです。つまりこの 2 冊の本というのは、哲学の言葉で言うと哲学と倫理学に対応している。要するに哲工学と倫理工学のようなことをやっていたのではないかと、僭越ながら思っています。つまり、哲学や宗教と相似形の工学をやってきた人間だと思っていただければと思います。

この 2 冊の本について説明することで、宗教と私がやった研究とは関係があるのではないかという話をしたいと思います。資料の 5、6、7、8 はとばして、8 ページに行きましょう。8 ページがリベット先生の有名な実験です。カリフォルニア大学サンフランシスコ校の生理学者の先生で、もう退任されました。そのリベット先生の実験というのは、指を曲げようという自由意思が、本当は自由意思ではないのではないかという実験です。被験者の人に、指を曲げたくなったら曲げてください、あるいは腕でもいいのですけれども、曲げようという自由意思が意識に上ったら曲げてください、ということをします。そのときに「筋肉動け」という指令が、大脳の運動野というところに起きますから、「筋肉動け」という無意識的な指令が発せられる瞬間を脳に電極をつけて計るのです。つまり、無意識的に筋肉を動かす指令を計ります。

それと同時に、パッパッパッと光っている電光掲示板のような高速で光る時計を見ながら、曲げようという曲げる自由意思を感じた瞬間に、どこが光っていたかを言ってもらうのです。それによって意識による自由意思が起きた瞬間を計ろうとしたものです。つまり意識の上に上る自由意思が曲げようと思う瞬間と、無意識に「筋肉動け」という指令が出る瞬

※無断転載・複写はご遠慮ください。
間、それから 3 つめに、実際に指が動いた瞬間、この 3 つを計ったという実験です。

結果はけっこう衝撃的だといわれています。意識下で指を曲げようとする自由意志よりも 0.35 秒前にもう、運動準備電位がビューッと上がっているのです。0.35 秒というと、1 秒の 3 分の 1 ですから、走ると 5 メートルぐらい走れるぐらいの時間です。0.35 秒前には指を曲げるということがもう決まっていて、その結果を受け取って、自分の自由意思で曲げようと思ったという、茂木さんの言葉で言うとクオリアを知覚します。自由意思のようなものは、後で湧き上がったというふうに捉えないと、この研究は説明できないといわれています。

ただリベット先生はクリスチャンで、アメリカ人なので、自由意思がないというのはどうも信じられない。ですから拒否権があるのではないかと言っています。最後の最後にやっぱりやめたというのを決めるために意識があって、やはり意識は自由意思を持っているのではないかというふうに言っています。しかし、この考えは証明されても、観測されてもいません。ですから、私はやはり自由意思というのはなくて、無意識的な決定に従って、自由意思のような幻想が私たちの心に湧き上がるにすぎないと考えていいのではないかと考えています。

次のページも似たような、ガザニガ先生というお医者さんの実験です。分離脳患者といって、左右の脳の脳梁というつなぐ所が切れた患者がいます。完全に分離していたのかどうかという点への異論はあるのですけれども、それは置いておきましょう。この患者さんの右脳に向かって「前へ歩いてください」と言うと、この人は歩きます。今度は左脳に向かって、つまり右耳だけに聞こえるように左脳に「どうして歩いているのですか」と聞くわけです。そうすると左脳は知らないですから、「なぜか分からないけれども、右脳が歩かせたからじゃないですかね」とか答えそうなものです。ところが、「のどが渇いたのでジュースを買おうと思って、目の前にある自動販売機に向かって歩いているのです」と、全く嘘をつくわけでもなく、自由意思かのように言うというのです。これも、脳は無意識的にいろいろな処理の結果、自由意思というのが湧き上がっていて、後付けで「私はのどが渇いたから歩こう」とか、「人に言われたから歩こう」という自由意思が、後で作られていると考えれば説明がつきます。つまり、右脳には「前へ歩いてください」という情報が入っていないので、勝手に残された脳だけで考えて、「のどが渇いたからジュースを買おうと思っている」という自由意志のようなものをでっちあげればちょうどつじつまが合うので、それが湧き上がってきて自由意思になっていると考えられます。つまり、自由意思というのは、最初に「歩いてください」と言われて歩くとか、ジュースを買おうとかと決めているものではなくて、無意識に従って、決めているように感じているものに過ぎないのだと考えれば納得がいきます。さきほどの実験と一緒です。やはり無意識的な処理が先にあって、その後で意識が幻想のような錯覚のようなものとしてあると考えれば、つじつまが合うのではないかということです。

下に書きました受動意識仮説というのは、名前は私がつけたのですけれども、リベット先生や、カリフォルニア工科大学の下條信輔先生などのいろいろな実験によって、意識は無意識的な自律分散処理結果に後で注意を向けて、あたかも自分が行なったかのように、体験するだけのものではないかということを裏付ける結果はたくさんあります。

金子：このエピソード記憶の「エピソード」というのがくっついている理由を少し説明していただけますか。

前野：私たちは意識で感じたことを記憶します。たとえば、「お昼のカツカレーはおいしかった」と記憶しますよね。それがエピソードとして残っていて、後で使えますね。このような体験の記憶がエピソード記憶です。意識は、何かを意思決定したりとか、心の中心的な役割を果たすのではなく、ただ演劇のように世の中を見て、それをエピソードに落とすためだけにあると考えればつじつまが合うのではないかということです。

これは賛否両論なのですけれども、私はほかに意識の理由もないので、これでいいのではないかと思っているところがあるのです。

つまり次のページの下の図でいうと、これは一般向けの図で恐縮なのですが、意識というのは左のように、全てを統合、統括するもののように思われがちですが、実は右のように知情意から流れてきたものをただ感じて、しかも自分がやったかのように感じているものにすぎないのではないかというのが、私の説です。

これを書いていたら、少し僭越なのですが、13 ページの石飛さんという方が、「前野先生の説はブッダと一緒よ」と書いているのです。この石飛先生によりますと、仏教では無我といいますが、無我は本当は無我なのか非我なのか、本来の意味はどちらなのかという論争があるそうなのです。つまり無我「私はない」なのか、非我「私ではない」なのかということで

※無断転載・複写はご遠慮ください。
す。私が脳科学から導いた、「意識は幻想である」というのは、私は本当はない幻のようなものだということなので、無我と一致します。それから無意識が先にあって、意識は後だというのは、意識ではない、自由意思のように意思決定しているのは意識ではなくて、無意識的な先行する処理なのだという意味なので、非我と一致します。私の現時点での考えは、ブッダという人は 2,500 年前に、脳科学がなかったのに、脳科学の実験と一致したことを言っていた人。少し乱暴かもしれませんが、私としてはそう捉えています。

そう捉えてから仏教を学ぶようになったのですけれども、やはり心は幻想であるということと、整合性がいいのではないかと思っているところです。それで、中村元先生や鈴木大拙先生の本などを読み漁って、私の言っていることと仏教は親和性が高いと思っています。

本質的な議論はここで個人的には、素人学者としては完結したので、ロボティクスに専念しようと思っていたのですが、あるとき気づいたのは倫理学をやっていないということです。われわれはどう生きるべきか。心が幻想だったとしても、どう生きるべきかという謎が解けていないと思ったのです。それで、私は哲学者ではなくて工学者として技術者倫理教育などをしていたのですが、幸福学というのはわれわれはどう生きるべきか、幸せに生きるべきだということなので、幸福学を始めました。哲学でいうと倫理学、宗教でいうと説法のような、「もっと感謝しましょう」というようなこととも近いと思ってやっています。

幸福学は、哲学的、演繹的な議論ではなくて、統計的に幸せになっている人はどういう人なのかという議論です。図の一番下に 4 つある、夢や目標を持ち、感謝をして、前向きで、自分らしい人なのです。こういう人間の生き方のようなことを、私の場合は工学者なので、統計的、実験的に求めた結果として論じているわけです。これが哲学や宗教の本質的な問題として説いていることと、ある面相似形になっているとすれば面白いですし、そういう議論をしていけると面白いと思っています。ですから私は、脳科学とか心理学とか、そういう知見のほうから、データから積み上げる宗教みたいな話ができればというふうに思っています。よろしくお願いいたします。

※無断転載・複写はご遠慮ください。

②金子務先生

よく日本人というのは無宗教だといいます。「あなたの宗教は何ですか」と言われると、「いや、私は無宗教です」と、けっこうなインテリがみんなそんなことを言うのです。一体それでは宗教をどういうふうに考えているのだろうという話に、たちまちなっていってしまうのですが。私自身の体験で言うと、日本人は無宗教だと言う人たちの多くは、ヨーロッパなどの一神教のキリスト教とかあるいは中東などのイスラム教とか、そういったものを見て、ああいった宗教ではないと、自分はべつに確固たる信念を持って宗教を信じているわけではないということが、基本にあるのかもしれません。だけど本当にそんなことを言っていていいのかな、というふうに僕は思うのです。

たとえばレヴィ・ストロースのいう『野生の思考』もこの宗教意識と関係すると思いますが、本性的にみんな野生の思考を持っているのです。そういうものの中から宗教的なものが芽生えているわけです。僕はよく若い人たちに話すのですが、それを示す一番いい映画作品は、黒澤明の『デルス・ウザーラ』という作品だ、あれを観てごらんよと。ヨーロッパ人の、宗教を非常に段階的に説明してキリスト教などを最高とするような近代主義者たちに言わせれば、あれはただ単なるアニミズムの一種で、原始的な愚かしいものだと、『デルス・ウザーラ』の主人公を両断しがちです。つまり火にも薪にも話しかけるし、クマにもウサギにも話しかけるし、みんなそういった無生物や生物に話しかけて、いわばそういうものと非常に近しい関係を作っている世界です。『デルス・ウザーラ』というのは、そういう実話的探検記録の世界を、黒澤明はかなり晩年になって失意のどん底にいるときに映画に作った作品です。満鉄映画社時代から暖めていた素材といわれていますね。それであえて注意を喚起しておきたいと思います。『野生の思考』などとも併せて、ああいったことを考えると、僕は普遍的に宗教的なものというのは、みんな実は持っているのではないかと。そもそも神話というのを持っていない民族はいないでしょう。神話があるというのは、何がしかの神性というものと関係があるから神話ができているわけで、それは人類共通の遺産でしょう。今の先生のお話でも、集合的無意識の中から共通の神話というのは生まれてくるのだというお話もあります。だから日本人が無宗教であるというのは簡単に言わないでと、私は思うのです。

私自身はアポロ 11 号の取材というのを、かつてジャーナリスト時代に行ったのです。あのときに月に初めて着陸したアームストロングとオールドリンという 2 人の宇宙飛行士がいて、オールドリンが一番最初に上陸して、それをアームストロングが写真を撮ったのです。そのオールドリンというのは結局帰って来たら何になったかというと、宣教師になってしまったのです。要するに神の領域に触れたということが、彼の世界観を変えてしまったのです。それからアームストロングのほうは大学の教授になりました。しかし同時に、ノアの方舟が漂着したというアララト山という山がトルコの東部にあって、―かつてアルメニアというキリスト教国に所属していたはずなのですが、それが第 1 次世界大戦のときにトルコが占領して、その山が今トルコ領になっていますが―、そこの山に足しげく登山を試みていたのです。あれも何か心境の変化があったのではないかと、僕などは思います。

僕はそういった劇的な心境の変化などというのはあまりないのですが、とにかく僕のジャーナリスト時代には大学紛争が非常にたけなわでして、その頃に暴れていた人もいるのではないかと思いますが、僕はそのとき新聞社系週刊誌のキャップをやっていたから、安田講堂の砦の落城の一部始終などの取材をしていました。だけど僕の尻ポケットには『盤珪禅師語録』と『歎異抄』が常に入っていました。盤珪禅師というのは江戸時代初期の坊さんです。これは鈴木大拙が再発見したというか、非常に重要だということでクローズアップされた禅の坊さんです。僕はどうして『盤珪禅師語録』が気に入ったかというと、キリスト教の教会などにも僕は顔を出していたのです。というのは YMCA とか語学の学校などへ行くと、必ずその合間にお説教があり、それで聖書についてのレクチャーをやるのです。そういったことを当時の日本の坊さんはやってくれない、葬式仏教といわれるように難解なお経を上げて事足りると思われていた。だけど江戸時代に盤珪禅師という人は一般の庶民を相手に、不生禅という、つまり禅の心あるいは仏心というのは生まれついてみんな備わっているもので、もうあなたの中にあるのだよと、何も修行して仏心を獲得するというようなばかなことは考えなくても、もともと生まれついてあるのだということを、非常に平易な言葉でおばあさんとか、病気の人とか、あるいは子どもを失った母親とか、そういった人たちに説法した人なのです。それをまた、鈴木大拙は非常に高く評価したのだろうと思うのです。

それから片一方の『歎異抄』のほうは、僕の恩師が木村雄吉という先生です。東大の本郷の前に「求道学舎」というの

※無断転載・複写はご遠慮ください。
があります。普通「求道」と書けば「ぐどう」と読むのですが、「ぐどう」というと自ら道を求めていくということですが、求道学舎は浄土真宗系の学舎なので、「きゅうどう」学舎と読ませているのです。絶対他力ですから仏の計らいで道を求めさせられるのです。そこの近角常観という人が明治宗教家の大立者で、『歎異抄』を再発見した人でもあるのです。この近角常観のお弟子さんで、がんの研究者であり生物の研究者でもあった木村雄吉という先生がその跡を継ぎました。ドイツ語の有名な辞書で木村・相良の辞書というのを皆さんご厄介になっているでしょう。あの辞書を出したゲーテ研究者の木村謹治さんというのは、木村雄吉先生のお兄さんです。そういった人に僕は薫陶を受けてきたのです。
ですから、そういう意味では私にとっては、無宗教だなどという言い方で済ませてくれるなという感じがあるのです。

※無断転載・複写はご遠慮ください。

③岡本拓司先生

最近、科学論のことを研究している過程で武市雄図馬『運命之研究』という本に出会い、大学院で取り上げるので予習しなければならないのでもってきました。科学と宗教の関わりは、科学史ではどの段階でも話題になります。それとは別に、こういうのを持ってきました。1 年生から大学院生まで教えていますが、これはどの段階でもよく使う資料で、エピソード記憶という先ほどお話があったのと少し似ているというか、いいアイデアだったかなという感じがしまして。これは結婚したいという人を、ここに入りなさい、そしてうまくマッチングしますという、キューピッドクラブというところの宣伝なのです。新聞から取ってきました。要するに雷が落ちたと書いてありますね。その会場に行ったときに運命の人を見たという女の人のエピソードです。

これは実話なのだと思いますけれども、まさに自分の運命の人がそのとき現れて、しかしとても自分には、と落ち込みそうになり、話しかけても駄目なのではないかと思うのを何とか抑えて、思い切って話してみたらば、次から次と途切れずに話すことができて、これで運命の人と会うことができて、結婚に至ったという紹介です。とても上手に作ってあって、これは男の人がこういう回想をしていると、女の人はつきまとわれる可能性もあると思いますので、こういうふうにやらないと、おそらくこの宣伝にはならないのですね。

そして結婚ですとか、あるいは人生の中のエピソード、誰か重要な人に出会ったとか、運命上の転機がここで訪れたとか、就職するとか、専門分野を選ぶとか、大学入試とかというようなところに、もしかしたらそれは決定論的に決まっているのかもしれないですけれども、ある種、運なども決定論ですけれども、自分の作為を超えた運命ですとか、大きな力のようなものを想定して物語を作るということは常にあります。それを使うということが、こういうクラブに人々を入れるための材料として有効に機能するから、こういう広告の仕方をするわけです。いろいろなことが、もしかしたら科学的に、合理的に理解できる決定論で決まっているのかもしれないですけれども、しかしあなたの人生もそうなのですかと言われたときに、多分それは人知を超えた運命のようなものがあって、その個々のエピソードが織りなす大きな物語を作って、おそらく自分の人生というのを理解するのだと思うのです。

ところが左側の「ご婚約カップルの皆さまです」というのをご覧いただくと、スペードは男でハートが女性なのだと思いますけれども、男は東京大学、女性は東京学芸大学、男は青山学院大学、女性は東洋英和というふうに、ご覧いただければ分かるとおり、学歴が男のほうが少し上で、女性が少し下という、おそらくこういう具合にしか選べないということです。そしてこういう具合にしないと、うまくいかないということなのだと思います。個々の人生が個々の人生で、唯一無二の、それしかないという人生で、そこにしかにないというエピソードで作られているとしても、どうも多く集めてみると、必ずしもそうではない力を読み取ることができるということも分かります。そして、このキューピッドクラブはおそらく商売なので、そうしないと成約率の高い商売には至らないから、こういうことをしているのだと思います。

左側が科学です。だから何を信じていても、どういう物語を作って信じていても、大きく集めればこういう傾向に従わざるを得なくなります。基本的には、これは個々のエピソードの正しさには関わりのない話です。つまり自分がこの人が運命の人だと思っている、そのことの正しさには、左側の科学は関わりがないのです。たまたま私が東京大学だけれども、東京学芸大学に運命の人がいたからこれが運命で、そう結婚したのであって、学歴を見渡してとか、あるいは収入とか出身階層を見渡してここへ至ったのではないと言われれば、それはそうですね。それはべつに否定できないことなので、左側の統計が個々のエピソードを信じている人たちの、その信念を否定することはできません。

こう言うとニュートラルに言っているようですが、実はニュートラルではなくて、こうやってたくさん集めて詳細に書いてしまうと、おそらく効果としては個々のエピソードの正しさを否定することになります。

つまり、たくさん集めて、同じようなことを多くの人が思ってしていますよというふうに言えば、それは個々のエピソードのそれなりの貴重さを減ずることにはなります。私はどちらかというと、職業としては個々のエピソードの意義を減じながら語るというところにいます。つまり歴史学とか社会学とか、経済学というのはそういう要素があるので、個々のエピソードを信じている人でも、どうしても受け入れざるを得ない事実や傾向というのを、個々の話を信じるに至る材料とは違う材料を使って、違う話し方をして説明するというタイプの学問に身を置いているというところだと思います。

※無断転載・複写はご遠慮ください。

もっと現実的に言えば、このキューピッドクラブは一方で商売ですから、左側にあるような学歴の違いとか、おそらくもっと細かく見ると思います。出身階層とか、あるいは出身の地方とか、そんなことも見るかと思います。これをまた細かくやって、うまくいく方法を考えつつ、しかしストーリーとしては、運命の人に出会ったというストーリーを宣伝に使うわけですから、そのことも絶対に否定はしないです。否定しないほうが商売の戦略としてはうまくいくということも分かっています。私が歴史とか何とかというのから言うと、どちらかというと、おそらくこの運命の話のほうは、「みんなそう思っているよね」という感じで扱ってしまうのですが、おそらく商売だと、そうはできないというところだと思います。これをよく科学史で、宗教の話はずっと切れ目なく近代に至るまで続くので、1 年生や 2 年生だと、どうして科学史とか科学技術基礎論だというのに、そんなに宗教の話をするのですかと言われるときに、よく使います。「あなたの人生には運命的な出会いとかはなかったのですか」と聞くと、頑張って無理して、「ないです。一切ないです」と言う人はいますけれども、なかなかそうはいかないのです。あるいは、今結婚しますというときに、「あなたは運命の人ではないのだけれど」ということは、なかなかは言えないですよねということを言うときに、よくこういう材料を使います。前に言及したこの本は、予習が足りなくて、これを出して予習していたので読んでいたのですけれども、たまたま大正期に書かれた。

金子：何の本ですか。

岡本：少し関係があってよかったです。『易と自然科学　運命の研究』という、武市雄図馬、ユズマというのか、カツマというのか、オトマというのか分かりませんけれども。まさに易学も自然科学の挑戦を受けて、明治維新以降いろいろ考えるのですけれども、これは大正に出た大変厚い本で、自然科学の挑戦を易学で何とか吸収しようという、それでも易学を成り立たせようという趣旨で書かれたものです。

※無断転載・複写はご遠慮ください。

④植木雅俊先生

私は宗教については否定する部分と肯定する部分と、両面を持っております。否定する部分というのは、盲目的な、この結婚のすすめの話もそうですけれども、そういう盲目性を利用して何かをやらせたりするような側面があるのも事実です。たとえば先ほど金子先生が、アポロ 11 号のオールドリンの話をされていましたけれども、畏敬の念を感じたと。それはいいと思うのですが、それが盲目的に畏敬が続いていくと、それを悪用する人が出てくる。その点を心配しています。

アインシュタインも、「科学なき信仰は盲目で、宗教なき科学は足萎えである」とおっしゃっていましたけれども、ひょっとしたら科学自体の問題ではなくても、そういう盲目的なものを煽り立てる人が出てきます。その辺を心配しています。それもある意味では、科学が宗教的な働きになってしまって、一部だけを誇大宣伝して、科学万能主義のようなものを煽り立てるところもあります。

要するに科学と宗教は、相互補完的に重要なものだと思いますが、それを悪用する人がいるので、それに迷わされない人間の賢さが必要だと思います。歴史上の人物としての釈尊は、迷信やドグマなどを徹底的に否定しました。ところが、釈尊滅後には、徐々に迷信的なものが入り込んでしまいました。大乗仏教も普遍性を説いていたかと思えば、時間を経るに従って、真言陀羅尼のようなおまじないが取り込まれるといったことがありました。その点が一番問題だと思っています。

その問題と思った 1 つで、ある国立大学の教授に呼ばれまして、相談されたことがあったのです。それは、ある四国の高名な、霊験あらたかだというお寺に行ってある相談をしたら、じっと顔を見られて、「あなたは早死にの相がある。八十歳まで生きられる祈祷をやってあげましょう」とやってもらったら、何百万円か請求されたというのです。それで「植木さん、これをどう思いますか」と聞かれたので、「それは詐欺でしょう」と。そこでは詐欺と言いましたけれども、詐欺的行為とここでは言ったほうがいいですか。そこに尋ねて行って、生年月日と戸籍上の名前を書きなさいと言われて書いた。その方の戸籍上の名前は、苗字の 2 文字の間にカタカナが入るのです。たとえば漫画家の石森章太郎が、晩年には「ノ」を入れて「石ノ森」と改めていましたが、それと同様に、普段はカタカナを入れてなくて、本を出版する時も入れておられません。たくさん本を出されている方です。その僧侶の口からその戸籍上の名前が出てきたのです。戸籍上の名前尾書いた紙を丸めて、目の前で燃やして、あなたの戸籍上の名前は何でしょうと、生年月日も当てたものだから、もう舞い上がってしまったみたいです。これはすごいと思っているところへ、その人の顔をじーっと見つめて、「あなたは早死にの相がある」と来たものだから、もう乗っかってしまったのです。それで何百万もお金を払ってしまったということを聞いて、それは詐欺的行為でしょうと答えました。あなたが何月何日に来るのは分かっているし、住所も分かっているし、名前も分かっていて、戸籍上の名前なんてどこかに記録されているでしょう。それは、前もって調べれば済むことでしょうと答えました。私はそこで言ったのは、そんなどこかに記録されていることを当てたからすごいとは思わないでください。私だったら、「きのうの晩飯、何食ったか当ててごらん」と言います。自分でも分からないでしょう。あれ、きのうの晩飯は何食ったかな――と、自分でも分からないぐらいだから、それを当てたらすごいですよと冗談を言って帰ってきたのです。そのように、宗教の名を借りて人の弱みにつけ込んだりするようなところがあるのも、これは大問題であるということを考えています。

こうした人の弱みにつけ込んで金品を出させたり、出さなければ恫喝し、呪いをかけるような話が原始仏典（中村元訳註『ブッダのことば』、二一〇～二一七頁）に出てきて、釈尊はここでも、そのような迷信を否定し、不安を取り除き、安心を与えています。

こうしたことを知ると、僕は仏教の中でも原始仏教を重視したいと思っているのです。中村先生も原始仏教に帰らなければいけないという話をされていました。それは、そういう迷信的なものを排除していたという点が一番大きいと思います。中村先生のところでずっと勉強していまして、インドのタゴール大学の学長さんがおみえになったときに、話をする機会があって、タゴールが仏教を評価していたという話がありました。どういう点を評価していたかというのは、まず第 1 点に徹底して迷信を排除したということです。生まれでバラモンを頂点とするカースト制度が決まるとか、そういう差別制度というものを否定していました。あるいは沐浴とか、火を燃やして行なうホーマ（護摩）の儀式も「堕落した祭儀」と批判するなど、いろいろな迷信を徹底して合理的に排除しています。沐浴することで穢れがなくなるのだったら、魚やカメやワニは生涯

※無断転載・複写はご遠慮ください。
水の中にいるから、一番穢れがなくていいではないかというような、反例をたくさん突きつけて批判しました。あるいは火を使って穢れがなくなるのだったら、鍛冶屋さんは朝から晩まで火のそばでトンチンカンとやっているのに、カースト制度では一番身分が低いのは矛盾するだろうと、そういう矛盾をどんどん突きつけて、徹底的に迷信を排除しました。カースト制度の平等ということを説いて、生まれによって尊いとか賤しいとかがあるのではなく、行いによって尊いか賤しいかが決まるのだということを説いています。生まれによるというのは過去世の業ですね。過去世がこうだったからあなたはこうなのだという言い方をしたのはバラモン教です。仏教はそれは言わないで、現在のあなたの生き方で尊くも賤しくもなりますということを説いて、平等主義も言いました。

そういうことができた背景には、サンスクリット語で「ヤターブータム・パシュヤティ」、パーリ語で「ヤターブッチャム・パッサティ」という言葉があるのですが、これは「如実知見」と漢訳されました。ありのままに物事を見ることという意味です。お釈迦さんの覚りはそこだったのではないかと僕は思います。いろいろな仏教用語があって、最初に覚ったのは四聖諦だ、いや中道だ、いや十二因縁だと、いろいろに言われていますが、そうではなく、それぞれの個別の知識ではなく、ものの見方をお釈迦さんは覚ったのだろうと思います。断片的・個別的な知識ではなく、ありのままにものを見る見方を覚ったのだと。それまではバラモン教的な神話的な観点で物事、人間を見ていたのを全部取り払って、あるいは先入観や執着心で物事を見ていたのを全部取り払って、ありのままに見るということをお釈迦さんは説いたと思います。だから原始仏典の中には、お釈迦さんの教えを聞いて、弟子たちは「ありのままに物事を見るようになった」という言葉が、最古の原始仏典とされる『スッタニバータ』や、尼僧たちの体験をつづった詩集の『テーリーガーター』などにあったと思います。ここが僕は一番大事だったと思うのです。

本来仏教というのは先入観や、あるいは文化的背景とか、執着心とか、自分の固定観念などを全部取り払って、ありのままに物事を見るということを教えたのではないかと思っています。僕はそこに仏教の意義があると思っているのです。お釈迦さんが死んだ後、まだそれを全部なし崩しにして、権威主義的な発想で物事を決めつけてかかってくる、あるいは迷信的なことを宣揚していくということで、また元に戻ってしまったところがありました。それをまた、原始仏教の原点に戻そうという運動が大乗仏教であったと思いますが、そこで平等思想などの普遍性が探求されますが、そこにも時を経過するにつれて、また迷信的なものが忍び寄ってきている。仏教史を見ると、それを繰り返しているような気がしています。油断をしていると、迷信的なもの、権威主義的なものが忍び込んでしまいます。

仏教史をこのように見てくると、人間を原点に置いた仏教は、私は評価しますけれども、それ以外の迷信的なことを煽り立てるようなもの、あるいは物事をありのままに見せないようにするものは、私は否定的です。以上です。

※無断転載・複写はご遠慮ください。

⑤酒井邦嘉先生

こんにちは、酒井です。きのうよく寝られなくてテレビをつけたら、たまたま「アナザーストーリーズ」でユリ・ゲラーのことをやっていました。多分ある世代以上はご存じだと思うのですが、1970 年代に放映された念力や超能力の番組がテーマです。当時の担当プロデューサーは、面白ければよかろうと、トリックで何が悪い、という番組の作り方でした。それからユリ・ゲラー本人にインタビューに行っていますが、掘り下げ方にいろいろ思うところがありました。

まず、いわゆる超能力とか超心理学では、マジカル・パワーとして、何か神がかった特別な力、ある種の宗教的な力の存在を仮定しています。ユリ・ゲラー自身はマジシャンでしたが、その経歴を伏せてショーをやっていました。あらゆるトリックは、科学的あるいは合理的な手法によって不思議な現象を起こすものですが、それを「本物の能力」だと偽って見せる人がいるのです。

番組の最後に NHK のスタッフがユリ・ゲラーに対して、「あなたの力は本物なのですか？」と尋ねたところ、彼は「That is a good question. You should answer it.」と言って逃げました。超心理学者は、「超能力の存在はまだ否定されたわけではない」と言って逃げますから、いつまで経っても決着がつきません。

あるマジシャンが、アフリカの奥地でマジックを見せたら、神の使いと間違われて身の危険を感じたそうです。古代のシャーマンは、そういった能力を巧みに使って人々の心をつかんだのかもしれません。それから韓国や中国の王朝では、日食や月食の正確な予測が王様の象徴であり、科学的な予言力が人知を超えた力と見なされていました。

『科学という考え方』という中公新書の第 3 章で、ケプラーについてかなり書き込みました。彼は神学を背景として天球の調和を考え、そこに科学的な法則性を見出していきました。そこに葛藤があったというよりは、極めて深い宗教観を持っていて、世界の合理性というものに対して自分の力で少しでも理解したかったのでしょう。その一方でケプラーは、コペルニクスがデータの操作をしていて科学的ではないということを著書の中で指摘しています。

それからデカルトも、自分が見出した自然法則を神の存在によって証明しようと考えました。ニュートンに至って初めて、数役や純粋な科学的な合理性に基づいて証明されるようになり、近代科学が確立したわけです。アインシュタインは、少年時代にユダヤ教の教義に疑問を感じ、ユークリッド幾何学から受けた衝撃を受けたことが科学に進んだ動機となっています。

科学と宗教は、人間が持っている思考の二面性なのだろうと思います。単なる対立概念ではなくて、ある種の思い込みや、夢や、誤解が渦巻く中で、合理的な思考をどこまで貫けるかという辺りに、科学や宗教が位置づけられると私は考えています。

※無断転載・複写はご遠慮ください。

※2　科学と宗教～オウム真理教～

慶應義塾大学文学部 非常勤講師
正木 晃

私のもともとの恩師は山折哲雄先生でして、その後で山折先生に、密教を勉強したいというので、当時は高野山大学の助教授だった松長有慶先生を紹介されました。松長先生はその後、ラダックを中心にチベット密教の研究をなさり、高野山真言宗にも管長になられた方です。また 30 代の後半で、ツルテム・ケサンというチベット仏教の専門家を紹介されました。最近では、日本仏教は末木文美士先生、インド・チベット仏教は立川武蔵先生と歩調を合わせてというのが多いと思います。

全体としては「宗教と科学」というプリントにまとめてあるので、参考にしてください。1 つは、私が科学と宗教の問題に関わらざるを得なかった背景には、オウム真理教の裁判にずっと関わったという事実があります。その前に麻原彰光と対談したこともあるのですが、幸か不幸か大変嫌われまして、お付き合いせずに済みました。私が裁判に関わった被告は具体的な名前をあげれば、早川紀代秀の東京地裁、それから新実智光の東京高裁、昨年は一番最後に捕まった高橋克也です。特に新実君の場合は東京高裁で 3 日間連続、朝から晩まで、まず弁護側からの質問、それから検察側から、最後は裁判長からの質問を受けました。

オウム真理教のケースが、最近における、宗教と科学が変なかたちで結託した最悪の事例だろうと思います。特に末期の段階では、ルドラチャクリンのイニシエーションという名前で、覚せい剤と LSD をチャンポンにしたものを服用させていました。その状態で麻原のデータと称するものを音声で吹き込んでいたのです。それが入ったか入らなかったかを確認するのに、チオペンタールという自白剤を注射して、入ったかどかを確認するということをやっていました。

謀大学の大学院にいた人が身分を偽り、上九一色にあった施設に入って、それを体験したこともありました。半死半生の目にあったそうです。それくらいすさまじいことをやっていたようです。

宗教の神秘体験というのは、瞑想とは一体何かという問題に関わるのですが、河合隼雄先生に言わせれば、幻覚剤やその他を使うのは、ヒマラヤのてっぺんに行くのに、いきなりヘリコプターで行くようなものだそうです。いわゆる瞑想修行というのは、本来であれば、下から自分の足で一歩一歩上がっていくのが原則ですが、誰でもできるとは限らない。正直申し上げて、多分に先天的な資質が大きいと思います。割に簡単にできてしまう人と、相当努力をしてもできない人がいるのは事実です。その内容が本物なのかどうかの判定は極めて難しいと思いますが、常識では考えられないような体験をする人がいるのは事実です。

もう 1 つは先ほど言っていた超能力の問題です。徳島大学名誉教授の、赤松則夫先生と超能力者の実験というのを試みたことがあるのです。そのときは、少なくとも常識では考えられないことが起こりました。ビデオでも撮れるので、起こっているのかもしれないと思っています。そういうものも含めて、宗教と科学の非常に微妙なところというのは体験せざるを得なかったのです。

ちなみにオウムの場合はいろいろなことを実践していました。たとえばよく話題になったのは麻原彰晃が空中浮揚をするというのです。あれは特殊なノウハウがあって、それを習得すれば、皆さんでもできると思います。完全に結跏趺坐をして、クッションの上で斜め 45 度前に向かってクッと体を持ち上げると、浮くというより、ジャンプできるのです。結跏趺坐して、両足を完全に組んでしまっているから動かないと思っていると大間違いで、逆に体が持ち上がるのです。また韓国で体験をした事例では、一種のシャーマニズム的な瞑想をして、ある種の状態になりますと、両足が勝手に動いて、その結果、1 メーターぐらいの高さまでポンポン跳ねます。冗談抜きで、このくらいの高さまでパーン、パーン、パーン、パーンと跳ねます。もっとも、自分でコントロールしているのではなく、体が勝手に動いてしまうというのが実情です。

植木：それは座ったままですか。

※無断転載・複写はご遠慮ください。

正木：はい。韓国でそういう人がいます。ですからその瞬間を下からあおるように撮っていれば、完全に浮いているように映ります。本人の意思とは関係なく、簡単に動いてしまうみたいです。トランスセンデンタル・メディテーションというメディテーションが、今でもけっこうはやっていますが、このメディテーションでも、人によっては、本人の意思とは関係なく、ポーンと高く跳んでしまいます。この瞑想法は、特定の高さの声を出していって、脳に刺激をあたえるようなことをするのですが、全員とはいかないまでも、なかには跳ぶ人が出てきます。

そういったようなものを、特定の意図のもとに使うと、とんでもないことが起こります。先ほど植木先生がおっしゃったように、何百万もお金を取られた云々かんぬんというのはけっこうある話です。特に密教系の行者さんなどに、それでかなり汚いことをやっている人がいることは事実です。第三者的な目で見ていると、なぜひっかかるのか不思議ですが、ひっかかる人は案外、簡単にひっかかるということがあります。

今日お配りした資料は、金子先生からお話があったものですから、参考資料にいくつかプリントしていただきました。一番大きいのが、これはニュートンのプリンキピア発行 300 周年のときに、ローマのバチカンで大シンポジウムがありまして、そのときに発表された論考を集めて出版された論集からの抜粋です。これは『宇宙理解の統一を求めて―物理学・哲学・神学からの考察―』（1992　南総社）というタイトルで日本語訳されていますので、これを持って来ました。

それから、ディートリッヒ・ボンヘッファー（1906-1945）が書きのこした文章があります。この人はヒトラーの暗殺計画に関わって処刑されたドイツの神学者です。大変優れた方で、人格的にも非常に立派な方だったようです。獄中で膨大なものを書き残しまして、それが後になって外へ出て来ました。いわゆる獄中書簡集です。ちなみにこれは今回の問題とは関係がないのですが、彼がなぜヒトラーの暗殺計画に関わったかというと、「汝殺すなかれ」というのはキリスト教の絶対な金科玉条を盾にとって、無辜の民が次々に殺されていることを見過ごすということは、それ以上の罪であるという、そういう立場に立って暗殺計画に直接関わっていました。

ただ、半分以上は冗談で申し上げますが、一神教というのはずるいと思います。なぜなら、その私の行為が本当に間違ったものであるかどうかは、最後の審判で神が判断すると言っているからです。これは実にうまい言い方です。なにしろ、最終責任というか、最終判断というか、最も大きな問題は神に丸投げにしているのですから。とにかく、ボンヘッファーは 1945 年の 5 月、ドイツ第三帝国が崩壊する直前に処刑されました。

それからパウル・ティリッヒ（1886-1965）は、これも有名なプロテスタント神学の大家です。やはり科学と宗教についてかなり論じていた人なので、持ってまいりました。

では仏教はどうなのかというのですけれども、多分ここまで本格的なものはなかなかないのではないかと思います。たとえば今の日本の仏教学で、特に大乗仏教の起源をめぐって一番活躍されている佐々木閑先生は、もともと出身が理系ということもあるのかもしれませんが、仏教は科学とバッティングしないからすばらしいという意味のことをおっしゃっています。でも、ちょっとそれはどうかな？と私は思っています。仏教研究者で特に文献学が大変おできになる方は、実は理系出身がけっこう多いというのは、傾向としては面白いと思います。

まず宗教と科学の関係について、考えてみたいと思います。ここで問題にしているのは、実は仏教の瞑想におけるレベルを、脳波やその他で測ろうという動きが大分前からずっとあるという事実です。特に禅宗系統と密教系統でそれをやりたい派の人がいます。おやりになることは構わないのですけれども、問題はいろいろ指摘できます。たとえばα波が出ました、だからすばらしい瞑想といいます。しかし、私には、なぜすばらしいのかよく分からないのです。そして、結局何が起こるかというと、悟りを求めて瞑想していたはずが、いつの間にかα波が出るような瞑想法になってしまうというのが、よくあるパターンなのです。結局α波が出たから偉いみたいな話になってしまうのです。それは本末転倒ではないのかということです。その最悪の事例が、オウム真理教のケースではないか、と考えられます。

瞑想修行をしていくと、通常では得られない深い体験をすると言われます。たとえば瞑想修行の中で「光」を見たという話がけっこうよくあります。そのときの「光」が、われわれが日常的に見ている「光」なのか、そうではなくて言葉としてはとりあ

※無断転載・複写はご遠慮ください。
えず「光」としか表現できない特殊な何かなのか、大きな問題があります。かなり専門的な例をあげると、中観派と並んで、インド大乗仏教界の二大学派を構成していた唯識派の瞑想修行では、認識にまつわるすべてのイメージを滅して、「光」のみの状態にすることを目指していました。瞑想修行における「光」は、そういうことまで含めて考えないといけないのですが、オウム真理教場合は、幻覚剤を使っていなかろうが、使っていようが、とにかく「光」を見たという体験さえあれば、修行のランキングが上がるということになっていました。
あるいは、クンバカという修行があります。非常に激しい呼吸を長時間にわたって繰り返し、突然止めるのです。すると、確かにバーンという感じで、「光」が見えたりするのです。それは多分に精神生理学的な問題だろうと思いますけれども、とのかく「光」が見えてから凄い！ みたいな話になりました。
実はそういう無理な修行をさせているうちに、信者が失神し、それを介抱しているうちに、介抱の方法をまちがったのか、その信者が死んでしまうという事件が起こりました。しかし、このことが外に出てしまうと、教団の存否にかかわるというので、隠蔽したのです。ところが、隠蔽は良くない、外部に報告すべきだという信者が出てきて、報告されたから困るというので、今度はその信者の首を絞めて殺してしまいました。どうやら、これが、オウム真理教が暴走し始めた発端のようです。その後も、似たようなことがずいぶんあって、最終的にはサリン事件のような、悲惨きわまりない事態を起こしてしまいました。
　オウム真理教では、よく報道されていたように、かなりの数の理系出身の信者が中心にいました。私自身も、サリンの製造に関わってしまった青年のお母さんから相談を受けていました。結局、彼は 2 年間、刑務所で過ごすことになりました。そして、刑期を終えて、出てきた日に会ました。その半年後にはチベットへ連れて行き、私が尊敬しているセラ寺の最高長老のチャンバイ・ワンジェーという方のところへ連れて行きました。ちなみに、セラ寺はダライ・ラマの宗派であるゲルク派の大寺院で、かつて河口慧海が留学していたことで有名です。
チャンバイ・ワンジェー師に「この人はこういうことをやってしまったのですけれども、救われますか」と尋ねましたら、師は言下に「真に懺悔すれば、救われる」とおっしゃいました。これは、文字どおり仏教的な模範回答だろうと思っています。彼はその後立ち直って、普通の社会人生活をしています。しかし、立ち直れないで、ずっとそのままオウム真理教の信者でありつづけている人も、少なからずいます。
　具体的な例をあげましょうか。あるとき私のところに、元やくざの親分で、マスコミでもけっこう名を知られた信者の方が来ました。私が、なぜあなたはいつまで経っても、麻原から離れられないのですか？と訊いたところ、こういう答えが返ってきました。その人は若い頃にある女性を自殺に追い込んでしまったのだそうで、その怨霊というか亡霊というか分かりませんが、霊的な存在に悩まされ続けていたそうです。それを麻原が消してくれたというのです。だから私は麻原彰晃には一生の恩義がある。したがって、絶対に裏切れないという意味のことを言っていました。彼はオウム真理教関連の犯罪にはかかわっていなかったので訴追もされず、今でも中部地方の山岳地帯で独自の活動をつづけています。麻原が何をどうしたのか、まったくわかりません。しかし、少なくとも元やくざの親分にとっては、一生の恩人だったというわけです。
　やや話が遠くに行きすぎたようですので、もとに戻します。次は、宗教の基本構造についてです。レジュメの 3 枚目のところを見ていただくと、「教行信証」という言葉があります。なお、「教行信証」は親鸞の有名な著書のタイトルでもあります。「教行信証」は宗教と科学の関係を説明するときに、私がよく使う概念です。宗教では、教えがあって行為があって、信じるから証があるのです。ところが、科学は証明されたら信じるというか、信と証の関係が宗教と科学では逆転しているのではないかと思うのです。宗教の場合は、まず信仰がなければ証はない、つまりまず信じることからしか始まらないのです。
　これは津田真一という密教学の先生がよくおっしゃっていることなのですが、宗教は「無底」、すなわち「底が無い」のです。単純化してしまえば、宙に浮いているということなのです。イエスが神の子であったか、神そのものであったか、もしくはそのどちらでもあったのか、なかったのか、は証明のしようがありません。ブッダが本当に悟りを得たかどうかも証明のしようはありませんし、ムハンマドが本当に、全知全能のアッラーという神から言葉を預かったかどうかも証明のしようがないのです。そ

※無断転載・複写はご遠慮ください。
ういう意味では、宗教は常に宙に浮いた状態にあるというわけです。
ヨーロッパで成立したキリスト教神学は、それこそゴシック建築のように堅固にできていますけれども、さきほどふれたボンヘッファーでも、イエスが神であったかなかったか、という問題は取り扱わないのです。初めから神であったというところから出発していて、イエスが神であったかなかったか、という問いは問われません。まさに宙に浮いた話で、イエスが神であったことを信じないのであれば、そもそもキリスト教は成り立たないのです。俗に、信じる者は救われるといいますけれども、まさにそのとおり、信じたからいろいろなことが生起してくるのであって、それぞれの宗教にとって最も根源的な部分に関しては、客観的な証明はできないのです。
ただし、できないとされてきた客観的な証明を是非したいという人も、たくさんいます。ブッダが本当に悟ったかとか、イエスが神もしくは神の子であったとことは、さすがに証明証とは考えないようですが、その一端が、さきほど申し上げたように、瞑想における脳波の測定などにつながっています。確か NHK でも放映されましたが、修行をしているとセロトニンのレセプターの量が爆発的に増えるという事実が確認できるので、当然ながら、脳の中ではセロトニンが大量に放出されていることは十分に考えられます。その種のことはいくらでも証明はできるのですが、だから瞑想とは科学的にはこういうことだと言われても、話が短絡しすぎていて困ってしまうわけです。特に仏教の場合は、浄土真宗などを除けば、必ず修行をします。言い換えると、ただ信じるだけではないので、かえって科学的な探求という要素が入って来やすい傾向があります。
一神教の場合は、瞑想修行はほとんどしません。しても、仏教などインドゆらいの宗教に比べると、瞑想の方法論も技術も、はるかに低い次元にとどまります。イスラム教の場合は、基本的に瞑想修行は禁止です。
一神教が瞑想修行にあまり関心を持ってこなかった理由は、ご存じのとおり、個人の救済より共同体の救済を優先したからにほかなりません。そもそも一神教は、はっきり言って、掟の宗教です。
「モーセの十戒」では「戒」と訳されていますが、仏教の「戒」とはまったく違います。、仏教の「戒」は、自発的な誓いです。べつにブッダが、おまえたちはこうしろと強制したわけでも何でもなくて、何か問題が起こったときにみんなで会議を開いて、今度はこういうことが起こらないようにしようということで、つくられたものであって、あくまでも自発的な誓いです。もちろん、時代とともに、「戒」の意味も変容していって、規律を意味する「律」とセットになると、ある種の強制力をもつようになりましたが、基本はあくまで自発的な誓いです。それに対し、モーセの十戒は、全知全能の神が、智恵が十分ではない人間たちに、良かれと考えて、ああせい、こうせい、と強制してきたものです。そういった意味で、同じ戒という字を使っていますけれども内容が全く違うということです。
基本的には一神教、特にイスラム教などの場合には、コーランに書かれているとおり生きることが宗教生活のほとんど全てですから、修行してはいけないのです。私は 30 年ほど前にイスラム神秘主義（スーフィズム）を勉強しようと思っていたものですから、井筒俊彦先生のところにまいりました。当時先生が岩波からお出しになった本を読んでいて、それこそイスラム神秘主義の到達したレベルが非常に高かったので、これは勉強するに値すると思っていたのです。しかし、もう少し経ってから勉強したら、イスラム神秘主義というのは、確かにレベルは高かったものの、イスラム教の中の異端中の異端で、ごくごくマイナーな存在に過ぎなかったのです。ちなみに井筒先生のお話では、イスラム神秘主義における瞑想技法のほとんどはインドのヨーガの引き写しであって、それは証明できるという意味のことをおっしゃっておられました。
これは余計な話なのですが、きのうも IS がドイツでテロを実行しました。なぜやるのですかとよく質問があるのですが、コーランに世界中がイスラム教徒ただ一筋になるまで、多神教徒を全部殺せと明確に書いてあるからです。ですから、ISにすれば、絶対の聖典に書いてあることを実践して何が悪いという居直りだと思います。イスラム教の歴史を振り返ると、文言どおりに実践することは、ごく初期を除けば、ほとんどありませんでしたが、コーランそのものに明確に書かれているのは事実です。これをどう封印するか、イスラム教に課せられた大きな案件だと思います。
とにかく「教行信証」という概念は、おそらく宗教と科学を考える上で、一つ大きな指標になるのだろうという気はします。時間も短いので結論的な話に移ります。

※無断転載・複写はご遠慮ください。
結局のところ、ヨーロッパのキリスト教神学の場合は、ガリレオやケプラーをはじめとする宗教と科学の葛藤や軋轢を経て、互丼を分離しましょうという話になり、お互い干渉しないというのが基本的な立場となりました。そのことを一番明確に語っているのは、資料の一番最初にある、当時のヨハネ・パウロ 2 世が寄稿された文章です。ここでは物理学から生物学から、いろいろなものを引用しながら書いてありますが、多分重要なのは 4 ページ目の後ろから 4 行目のところです。「いっそう明確にいえば、宗教と科学の両者は、自分たちの自立性とそれぞれの差異を保たねばなりません。宗教は科学に基礎を置くものではなく、また科学は宗教の拡張でもありません。各々その固有の原理特定の手法、解釈の多様性および固有の結論を持つべきです。キリスト教はそれ自体の内にその正当性の源を持っており、科学にキリスト教の第一の護教論を築くよう期待していません。科学はその固有の価値に対する証人を引き受けねばなりません」という部分で、これが結論だろうと思います。

この考え方からすれば、瞑想を科学的に研究するのはけっこうですが、それをもって悟りとはどうのこうのと、結論めいたものを出さないほうがいいだろうと、私は思っています。

日本の場合も、近代化の中で仏教が非常に大きく変容しました。日本仏教の近代化とは何か、を振り返ってみると、仏教をできる限り、哲学化し思想化することでした。哲学化や思想化できる仏教が、近代社会に適合する良い仏教で、そうでない仏教は良くない仏教という発想です。そもそも仏教学という学問は、もっぱら経典や論書に書かれている言葉を、ああでもない、こうでもない、と詮索するのが主な作業ですから、修行は研究対象になりません。しかも哲学も思想も所詮、頭の中の問題ですから、身体は排除されてしまいます。こういう価値観でいくと、修行と身体は不可分の関係にありますから、修行をするタイプの仏教は、ダメな仏教という烙印を押されることになります。修行なき仏教はあり得ないはずなのに、日本仏教は近代化の結果、まるで反対の方向へと向かってしまったのです。

それから一番大きなスペースを割いたのは、霊魂論と死後世界論です。先ほど少し申し上げたように、霊魂論や我の問題をきちんと見直さないといけないと考えているからです。霊魂論と死後世界論について、仏教はどういう流れでここまで来たかというのを第 3 章で書きました。これを科学という領域から考えたときにどうなるかというのは大きな課題だと思いますが、私は結論的には、科学とあまり関わらないほうがいいと思っています。宗教は宗教の世界で、ヨハネ・パウロ 2 世もおっしゃっているようにおさめておかないと、かえって変なことになってしまいます。先ほどから申し上げているように、宗教というのは宙に浮いた状態のもので、良くも悪くも、科学的な検証とは根本的に違っているのだと思うのです。

宗教的な思考と科学的な思考の違いを、もしくは齟齬を、現時点で最も良く垣間見せてくれる事例は、イスラム世界だと考えます。そして、おそらくこれは、なぜイスラム世界が近代化できないのかという大きなテーマと関わってくると思います。同志社大学の内藤正典先生の『イスラムの怒り』（2009　集英社新書）からの引用です。彼が留学していたトルコでは、学校ではどこでも理科の時間に物理学などを教える。ニュートンも教えるのだそうです。けれども実際この世で何が起こるかということは、100 パーセント神に決定権があるので、結果的に物理学的な発想が全く身につかないというのです。トルコでは、交通事故の第 1 位が正面衝突だそうです。ぶつかるかぶつからないかは、われわれの問題ではなく、神が初めからぶつけようと思っているか、ぶつけようと思っていないかの問題だからというので、めちゃめちゃな追い抜きをするためだそうです。結果的に正面衝突が起こるというのです。これが典型的な例です。内藤先生という方は、本のタイトルからわかるように、イスラム教に同調的な方ですから、この話は多分本当なのでしょう。要するに、イスラム教を徹底して信仰してしまえば、科学の介在する余地はまったくないわけです。リンゴが落ちるのは神が落ちろと言っている、ということです。ある日突然、神が気を変えて、宙に浮けと言えば宙に浮いているという論理です。このあたりが、いわゆる近代的、科学的なものの考え方がイスラム圏で浸透していかない大きな理由だと思います。確かにコーランを絶対視して、そのとおりに生きることが宗教生活の全てであるとすれば、科学的な検証やものの考え方が介在する余地はなくなります。それで幸せならいいのかもしれませんが、現状はああいう状態ですから、さあどうしましょうという話です。

それに対して仏教のほうは、割に近代化に対して従順なところがあります。たとえば、仏教の代表的な宇宙論である須

※無断転載・複写はご遠慮ください。
弥山宇宙論は天動説に近かったのです。ところが、幕末あるいは明治初期に地動説が入ってきたときに、実は割に簡単に受け入れてしまったのです。佐田介石をはじめ、何人か反対し、天動説にもとづいて非常に精密に動く宇宙のからくりを作った人もいました。しかし、いつの間にかうやむやになって、地動説を受け入れてしまいました。これが仏教だからなのか、日本化された仏教だからなのかは微妙なところだと思いますが、いずれにしろ西洋的な科学知識が入ってきたときに、あまり抵抗はしなかったことは事実です。

近代化に一番うまく適合した宗教というのは、一般には浄土真宗といわれています。しかし、私は日蓮宗のほうがよほどうまくやったのではないかと思っています。その証拠に、現時点で、日蓮系の宗派に属している信者の数は、伝統派と新宗教をあわせると 2300 万人にも及ぶそうです。逆に一番うまくいかなかったのが密教系で、一番過酷な弾圧を受けたのが修験道、山伏です。明治 5 年の修験道廃令で 17 万人の修験者、山伏が追放されています。当時の人口は今の 4 分の 1 程度でしょうから、現在の人口に換算すると 70 万人近くいたはずです。つまり、至るところにいた修験者・山伏が、徹底的に追放されてしまいました。そういうことはありましたが、仏教界全体としては何となくうまく受け入れたと言えます。少なくとも、宗教的な理由で、反乱を起こした例は、熊本の神風連のように、神道系にはありましたが、仏教系にはありませんでした。特に浄土真宗や日蓮宗というのはけっこううまく近代化を遂げてしまいました。それはおそらく、この 2 つの宗派が持っているものの考え方が案外合理的だったからかもしれません。むしろ、加持や祈祷をするとか、宗教的なパフォーマンスをするところは大体みんな駄目になりました。割に観念的というか、思想化や哲学化が比較的しやすかった宗派は、うまくいったということでしょう。

日蓮宗や浄土真宗とは違うかたちで、近代化に成功したのが禅宗です。禅というのは、ある種独特の合理性を持っていますし、神や仏の実在性を取りあえず横に置いておいても成り立ちます。もう一つは鈴木大拙という存在が極めて大きかったと思います。英語できちんとものが言えたということは非常に大きかったと思います。今でも、スティーブ・ジョブズみたいに、禅に帰依する知識人が多いのは、鈴木大拙が英語で禅を語れたことが、多分に影響しています。

もう一つ言えば、日本の伝統仏教界は、全体としては、沈滞する傾向がありましたが、それに代わるかたちで新宗教が、時代の要請に応えて大きく伸びていったというのが日本の近代だと思います。ですから、仏教全体が衰退したとは私は思っていません。伝統宗教のかなりの部分が衰退した代わりに、それを新宗教が穴埋めをするかたちで今日まで至ったというのが歴史的な事実だと思います。

残り時間がもう少なくなってしまったので、このあたりでまとめなければなりません。お配りした資料の中で、特にキリスト教に関しては、ティリッヒの見解が重要です。たとえば、「信仰の真理と歴史的真理」・「信仰の真理と哲学的真理」とあって、「信仰の真理と科学的真理」という文章があります。こういうかたちで、各領域と信仰というものを対比するかたちで、かなりうまく整理されているので、このあたりがプロテスタント神学としてはけっこう出来のいいものだろうという気はします。

ティリッヒに言わせると、「科学的真理は常に暫定的な真理なので、その暫定的な真理を前にして宗教家がうろたえることはない。・・・・・科学は常に書き換えられていくのであって、それに比べれば信仰というのは、ある種永遠不滅的な性格を持っているのだから、いちいちうろたえるな」ということです。これもかなり興味深い見解だと思います。30 分経ちましたので、これで私の話は終わらせていただきます。